



ツバキ(椿)

ツバキ科ツバキ属の植物の総称。狭義には、ヤブツバキをさします。

学名：*Camellia japonica* L

英名：Camellia

原産地：東アジア

分類：常緑低木

和名：ヤブツバキ



<ツバキとサザンカとの見分け方>

①ツバキは萼の部分から丸ごと落ちますが、サザンカは花びらが個々に散ります。②ツバキは雄しべの花糸が下半分くらいくっついていますが、サザンカは花糸がくっつきません。③ツバキは、花は完全には平開しません(カップ状のことも多い)が、サザンカは、ほとんど完全に平開します。④サザンカは子房、果実、葉の付け根に毛がうっすらと生えますが、ツバキは生えません。(原種は見分けやすいですが、園芸品種は多様性に富むので見分けにくい場合があります。)

<ツバキ属の植物>

ヤブツバキ(*C. Japonica*)：原種。分布は青森県以南。花期は冬から春にかけて。

サザンカ(*C. sasanqua*)：四国、九州以南にみられ、開花時期によって、晩秋から初冬まで咲くサザンカと冬から早春に開花するカンツバキ(*C. sasanqua* Thunb. 'Shishigashira')と冬から春まで咲くハルサザンカに分けられます。

チャノキ(*C. sinensis*)：ツバキやサザンカとの交雑種も見られます。

ナツツバキ(*Stewartia pseudocamellia*)はシャラノキともいい、ナツツバキ属で、種類が異なります。

<ツバキのいろいろ>

ユキツバキ(雪椿)：学名 *Camellia japonica* var. *decumbens* 上記のヤブツバキの豪雪地帯適応型変種で、東北から北陸にかけて分布。枝がしなやかで、花弁が水平に開き、雄しべはウメの雄しべのように花中に広がる等の特徴があります。花の変異が多く八重咲きの品種改良に大きく貢献しました。ヤブツバキとの交雑系統を「ユキバタツバキ」と呼び、オトメツバキがあります。

侘助(わびすけ)：ツバキの品種の一つで、「太郎冠者(たろうかじゃ)」という品種から派生したもの。雄しべが退化した品種の総称で、一般のツバキに比べて花は小型で、開き切らずに筒状になるのが特徴。葯が変形していて、受粉し難い。茶席には欠かせません。

匂いツバキ：匂いがあまりないツバキ・サザンカの中で沖縄地方の山地林内に自生するヒメサザンカ *Camellia lutchuensis* は最も芳香が有りますが、小輪であるため、他の種類と交配して新品種作りが進められています。ツバキは赤が主体で、色が派手なので、鳥や虫を呼び寄せるために香りがある必要がないので、香りが無いのだという説があります。

金花茶：中国からベトナムにかけて分布する、黄花のツバキ。寒さに弱いので、冬期は室内の明るい窓辺に置き、夜間-5℃以下にしなければ越冬します。

西洋ツバキ：19世紀に西洋に渡った日本のツバキが、西洋の美意識に基づいて品種改良されたもの。日本のツバキが「わび・さび」といった独自の感性の中で品種が生み出されたのに対して、優雅で華麗、豪華な花容のものが多いです。(タマ・ビューティー)

<ツバキの色・形のいろいろ>

花色：白斑；星斑(蜀紅)、雲状斑(岩根紋)、横空斑(正義) **覆輪**；白覆輪(隠れ磯)、紅覆輪(王冠)、底白 **絞り**；吹きかけ絞り(氷室雪月花)、小絞り(春の台)、縦絞り(葛城紋)

花形：**一重咲き** 猪口咲き(ワビスケ)、筒咲き(永楽)、抱え咲き(玉霞)、百合咲き、ラップ咲き、桔梗咲き、椀咲き、平開咲き

八重咲き 唐子咲き、八重咲き、千重咲き、蓮華咲き(羽衣)、列弁咲き、宝珠咲き(オトメツバキ)、牡丹咲き(雪牡丹)、獅子咲き

花の大きさ：極小輪(4cm以下)、小輪(4~6cm)、中輪(7~9cm)、大輪(10~12cm) 極大輪(13cm以上)

葉：葉も観賞の対象になります。江戸時代に、葉の突然変異を見つけ出し、選抜育成して、観賞しました。金魚葉、蘭铸(らんちゅう)葉、やすり葉、柊葉、斑入りなど

<育て方>

ポイント

日陰でも育ちますが、花つきが少なくなります。乾燥を嫌いますので、冬は強い風が当たらないような工夫をしましょう。

苗の選び方

挿し木苗、接ぎ木苗、実生苗がありますが、特に品種が確かなものを求めましょう。できれば、開花の様子を見て購入しましょう。

植え付け

庭植え：八重桜の咲くころを目安に、日当たり、水はけのよい肥沃地を選んで植えます。しかし、あまり日当たりが良すぎると、乾燥の心配があるので、午前中はいっぱい日があたり、午後はあまり当たらないところがよいです。大きな植え穴の底に堆肥を入れ、庭土を戻して、根をよく広げ、高植えにします。植えるときは水をたっぷりと与え、以後は与えすぎないこと。支柱とラベルを立て、遮光と葉からの過度の蒸散を防ぐために、周囲を寒冷紗で覆います。

9月上旬から10月上旬も植え付けは可能です。

鉢植え：用土は鹿沼土と日向土の小粒の等量混合土で3年ごとに鉢替えします。日向土の代わりに桐生砂でもよいです。これだと保水性も排水性もよく、水を与えすぎても根ぐされしにくいです。

施肥

寒肥え、花後のお礼肥え、8月から9月の追肥の3回施します。油粕と骨粉を等量混ぜたものを株下に1握りばらまきます。骨粉の代わりに粒状化成肥料を交ぜてもよいです。

剪定

萌芽力が強いので刈り込みにもよく耐えます。強く切り詰めることができますので、スペースに合わせて好みの形に仕立てることができます。

花後に伸びた新梢の先端に6月下旬から8月上旬にかけて花芽が作られますので、その後に剪定をしますと花が咲かなくなりますので、7月以降の剪定は基本的に行いません。刈り込み仕立てにするような強い剪定は、花芽がつく前、つまり花後すぐに行います。刈り込まずに自然樹形を保つ時も、花後に、花の咲いた枝を3～5芽残して切り戻します。どちらの場合も樹形ができた後は、樹形を乱すような強い枝を付け根から落とすくらいにして、せっかくなついた花芽を落とさないようにします。

ただし、剪定の間違いではなく、木が若いうちは枝がたくさん伸びるものの、花芽がつかないことがあります。

病害虫

チャドクガの幼虫：4月下旬と7月下旬の2回発生し、葉を食害します。幼虫や脱皮した抜け殻の毒毛に触れると激しいかゆみを起こしますので作業時には特に注意してください。卵は葉裏に黄橙色の卵塊として産み付けられるので、見つけしだい葉を切り取って処分します。発生初期の幼虫も葉裏に集団でいますので、アセフェート水和剤などを、葉の裏側に向けて噴霧してください。

花腐れ菌核病：最も恐れられている花の病気です。晩秋から春にかけて、前年の花がらに発生した胞子が空中に飛散して花につき感染します。最初は花卉に褐色の小斑点が生じ、次第に花卉全体に拡大し、褐色に腐ってきます。病気にかかった花や落ちた花がらをそのまま放置しないで集めて処分し感染源を残さないことが大切です。